

公益財団法人パナソニック教育財団 2018 年度共同研究・報告書

対話的な学習活動を促す教師の指導方法と授業改善に関する研究

中橋 雄（武蔵大学・教授：研究代表者）

鶴田利郎（国際医療福祉大学・専任講師）

山口真希（金沢市立大徳小学校・教諭）

宮崎 誠（川崎市立富士見台小学校・教諭）

薄井直之（古河市立上大野小学校・教諭）

栗原利香（古河市立上大野小学校・教諭）

2019 年 3 月 31 日

目次

1. 研究の背景・・・・・・・・・・ 1
2. ペア・グループ学習において対話を促すと考えられる指導方法・・・・・・・・・・ 1
3. 指導方法の有効性・・・・・・・・・・ 2
4. 「議論に関するデータ」から教師が授業改善のアイデアを得ることができるか・・・・・・・・・・ 4
5. 課題と展望・・・・・・ 37

1. 研究の背景

学習指導要領（平成 29 年告示）では、「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善」が求められている（文部科学省 2017）。教師が学習者に知識を伝達する一斉学習だけではなく、ペア・グループ学習において学習者同士が教え合い学び合う、対話的な協働学習を行うことが重視されている。

しかしながら、その指導方法は十分に確立されているとは言い難い。一見、対話が行われているようにみえて、実は学習の目的を達成させるようなものになっていない状況も見受けられる。そのため、学習者同士の対話の様子（実際にどのような対話が行われているか）を踏まえ、どのようにして対話を促せば深い学びに到達できるのか、「対話を促す指導方法」に関して研究することは、重要な研究課題であるといえる。

一斉授業の場面における教師と学習者の発話記録を分析した授業研究は多いが、ペア・グループに対する指導方法と有効性を検討した研究はあまり見受けられない。また、「学習者間の議論に関するデータ」が実践者の授業改善に活かされるかどうか検証した研究も見受けられない。

本研究の目的は、（1）ペア・グループ学習において対話を促すと考えられる指導方法を整理すること、（2）実証実践における「学習者間の対話に関するデータ」から指導方法の有効性を検証すること、（3）「学習者間の議論に関するデータ」から教師が授業改善のアイデアを得ることができるかどうか検証すること、の3点である。以下では、それぞれについて具体的な研究の方法と結果について報告する。

2. ペア・グループ学習において対話を促すと考えられる指導方法

ペア・グループ学習において対話を促すと考えられる指導方法を整理するために、教育実践者にヒアリング調査を行い、対話を促す指導方法について検討した。例えば、問いの設定方法、シンキングツールや心情円盤の活用方法、机間指導の方法など、対話を促す指導方法の可能性を整理した。その結果、以下に示す 18 の指導方法を抽出することができた。

「個別にワークシートに考えを書かせてから話し合わせる」

「心情円盤でお互いの考えを可視化する」

「思考ツールを活用する」

「ICT 機器を活用する」

「目的の明確なペア、グループ学習を取り入れる」

「よい話し合いのモデルを動画で示す」

「考えが分化するような課題を設定する」

「個人思考の時間を設定する」

「話型を指導する（質問の仕方、話のつなげ方、反応の仕方）」
「グループで考えを収束するような課題を設定する」
「対話に有効な語句を、いつも見えるところに掲示する（掲示内容は、話し合いをするごとに増やしていく）」
「「ホワイトボードミーティング」の語句を活用する」
「話し合いの課題のスマールステップ」
「児童にとって話し合う必要性のある課題を設定する」
「時間配分に気をつけさせる」
「根回しをする」
「あえて反対側の立場を取る」
「メモ用紙を工夫する」

もちろん、この他にも指導方法はあると考えられるが、授業改善の観点となりうる一定の枠組みを得ることができた。

3. 指導方法の有効性

実証実践における「学習者間の対話に関するデータ」から指導方法の有効性を検証するために、整理された指導方法のいくつかについて教育実践者に実践してもらい、「議論評価サービス（ハイラブル株式会社）」を利用して、その有効性を検討した（図 3-1）。

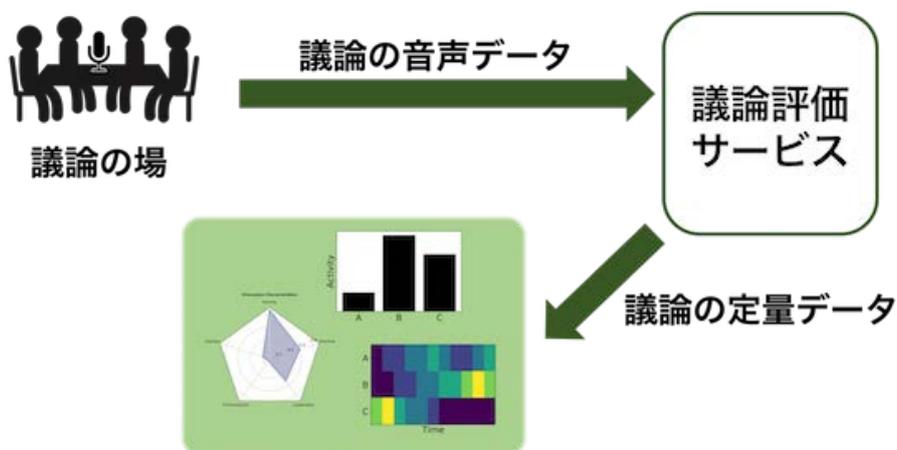


図 3-1 議論評価サービス (<https://www.hylable.com/products>)

上記の指導方法のアイデアを活かし、対話を取り入れた実践をするよう実践者（研究協力者）に依頼した。その際、2～4 グループに録音・分析するための装置を設置し、記録した（議論評価サービス（ハイラブル株式会社）を利用）。全部で 13 件の実践が行われ、録音データを収集す

ることができた。指導方法との関連までは明確にすることができなかったが、議論評価サービスによる評価の結果、対話に参加できない学習者はいなかった（図 3-2・図 3-3）。



図 3-2 授業におけるデータ収集の様子

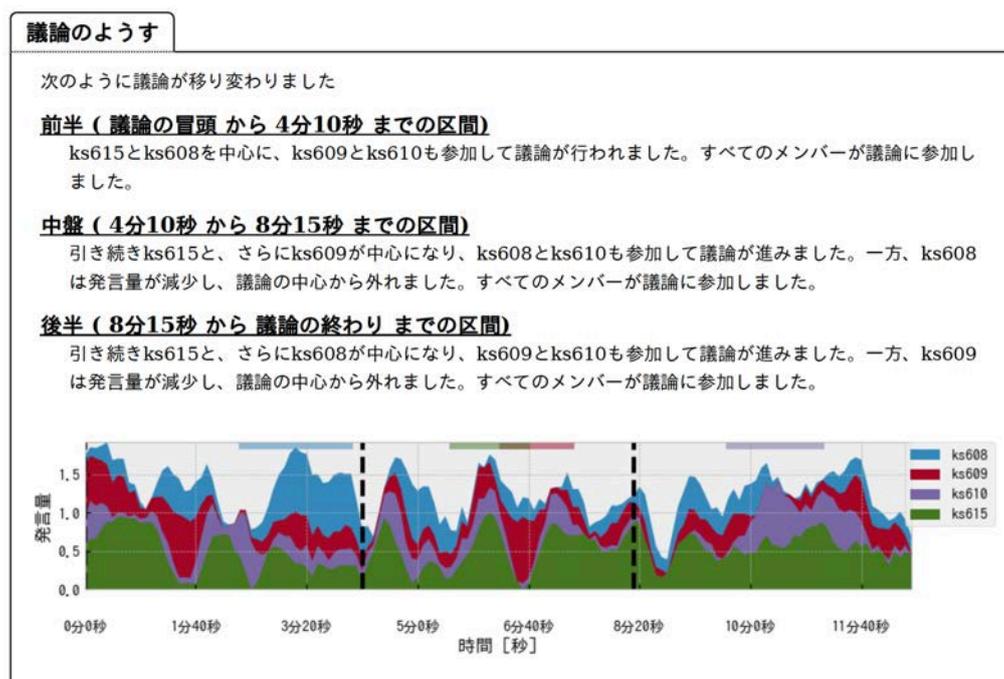


図 3-3 議論評価サービスによる評価画面

4. 「議論に関するデータ」から教師が授業改善のアイデアを得ることができるか

「議論に関するデータ」から教師が授業改善のアイデアを得ることができるか検証するために、実践者に「活かした指導方法のアイデア」「実践の概要」「記録を確認して得た授業改善のアイデア」を実践レポートとして提出してもらった。その結果、金沢市立大徳小学校5年生4実践、川崎市立富士見台小学校5年生4実践、古河市立上大野小学校6年生3実践・5年生2実践の実践レポートが提出された。「記録を確認して得た授業改善のアイデア」には、具体的に授業改善に関する記述を確認することができた。このことから、教師は、「議論に関するデータ」から授業改善のアイデアを得ることができたと考えられる。次頁以降、実践レポートを示す。

【対話的な学習活動に関する実践レポート1】

●実践者名（所属・担当学年）

山口真希（金沢市立大徳小学校・5年）

●議論を促す指導方法

- ・自分たちの提案を話し合いで「1つ」に絞らせる
- ・シンキングツール（フィッシュボーン図）を活用して、自分たちの主張・根拠・理由を明確に整理する。また、思考が可視化できるようにする。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

5年 国語 明日をつくるわたしたち

・学習の目標

思考ツールを使い、グループで話し合いながら提案内容の理由・根拠を明確にすることができる。

1 時間目

- ① 個人がフェスタ大徳に対する提案を持ち寄りその理由を説明する。
- ② グループで話し合い、提案を一つに決める。

2 時間目

| 学習活動 | 時 | 児童の主な思考の流れ | 支援と評価 |
|------------------------------|----|---|--|
| 1. 課題を確認する | 5 | ○説得力のある提案にするために、理由や根拠を整理して、はっきりさせる必要があります。今日はこの方法を身につけましょう。 | ・目的意識を持って学習できるように、本時の学習のゴールを共有する。 |
| 2. 番組を視聴し、フィッシュボーンで整理する方法を知る | 15 | <p><理由を整理して、はっきりさせるには></p> <p>○番組を視聴し、理由や根拠を整理する方法を学習しましょう。</p> <p>理由を整理するための道具「フィッシュボーン図」を使って、ある意見の理由と根拠をみんなで整理してみよう。</p> <p>・なるほど、こうやって整理するんだな。</p> | ・フィッシュボーン図で理由を整理する方法を学習できるようNHK for School の情報活用力育成番組『しまった』のクリップを視聴する。 |

| | | | |
|----------------------|----|--|--|
| 3. グループで、提案理由を整理する | 15 | <ul style="list-style-type: none"> ・できそうだよ。 <p>○自分達のグループの提案理由をフィッシュボーン図で整理しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちがフェスタの案内地図にお店を紹介するポップを書く理由は、地域の人がどんなお店か分かるから。 ・国語のポップ作りの学習も活かせるから。 ・お店の紹介をすることで、お店の人も喜んでくれるよ。これも理由だね。 ・僕たちがティッシュケースを作ってバザーで売りたい理由は、そのお金を震災の復興に使ってもらいたいから。 | <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な例を出して、思考ツールを使えるようにする |
| 4. フィッシュボーンズを使って説明する | 5 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人にも喜んでくれると思う。 <p>○自分達の提案理由が説得力のあるものになっているか、まわりの先生方に聞いてもらおう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちはこういう理由でこの活動をした | <ul style="list-style-type: none"> ・一人で整理することは難しいと予想されるので、グループで話し合いながら整理する。 |
| 5. 本時のふり返りをする | 5 | <ul style="list-style-type: none"> ・この理由はあまり納得できないな。 ・とても説得力のある案だね。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>理由をはっきりさせるには、フィッシュボーン図を使って整理するとよい。理由をはっきりすることで、説得力のある提案になる。校長先生を納得させられるといいな。</p> </div> | <ul style="list-style-type: none"> ・まわりの先生方にアドバイスをもらうことで、ブラッシュアップできるようにする <p>書 情 思考ツールを使い、グループで話し合いながら提案内容の理由・根拠を明確にすることができる（フィッシュボーン図・行動）</p> |

・対話の内容

- ①個人が提案を持ち寄り、グループとしての提案を一つに決めるための話し合い
- ②自分たちのグループの提案理由をフィッシュボーン図を使って整理するための話し合い

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・グループのみんなと絡み合う子と、特定の人としか絡まない子がいる。ファシリテーターは、絡み合いの少ない子同士をつなげる役割ができるように指導が必要。

- ・人の考えに対してつねに質問すべきところはないか「考えながら聞く」指導の必要性

・グループで案を一つにしぼるためには、個々が持ち寄った案にそれぞれの「こだわり」がなければ議論が活性化しない。こだわりを持たせるためには、個々の案をつくる段階で根拠を明確に持たせたり、また、そのために情報を集めたりする時間を確保しておかなければならない。

・フィッシュボーン図を使うことが初めてであったため、NHK for School の動画クリップ（フィッシュボーンの使い方）を一斉視聴した。さらに、再度グループで確認できるように、同じ動画クリップをタブレット端末で視聴できるようにしておいた。多くのグループがタブレット端末で動画を視聴してから話し合いに入っていたので、この方法は有効であった。

・フィッシュボーン図の根拠を書き出すための「観点」を与えるかどうか迷ったが、今回は4つの観点のうち3つを教師側から与えた。（人の役に立てる、学んだことを生かせる、地域とのつながりを持てる、あと一つは自分たちで考える）しかし録音を聞くと、観点があるから考えやすくなっている面もあるが、それぞれの観点が似通っていたため考えを出しづらくなっていることがわかる（同じじゃない？という発言が聞かれる） グループであと一つ観点を決めさせたが、他の3つの観点以外のものを出すのに時間がかかっていることがわかった。出せても他の観点と似ていることもわかった。観点の内容の再考が必要。



【対話的な学習活動に関する実践レポート2】

●実践者名（所属・担当学年）

山口真希（金沢市立大徳小学校・5年）

●議論を促す指導方法

3つの動画を分担視聴し、それぞれが分かったことを相手に説明する。3つの情報を組み合わせて分かったことをもとに課題に対する自分の納得解を導き出す。話す・聞く・調べる必要感を持たせるための指導方法。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

5年 社会 これからの食料生産とわたしたち

・学習の目標

我が国の食料生産をめぐる問題について、資料を活用して調べる活動を通して、日本の食料生産には食料自給率の低下や食の安全性などの問題があることを理解し、これからの食料生産のあり方について考えることができる。

・本時の流れ

①前時の復習をする

・日本の食料自給率が低下しているグラフを示し、なぜこんなに低下したのか原因を予想する。

・短い動画（動画クリップ）を一斉視聴し、食生活の変化による輸入の増加が、日本の食料自給率の低下につながっていることを確認する。

学習課題＜日本の食糧自給率は低いままでよいのか＞

②課題解決に向けて、タブレット端末で動画クリップを分担視聴する

・3種類の動画クリップを分担視聴し、わかったことや疑問を付箋にメモしておく

・あとでグループのメンバーに説明するときの根拠となる象徴シーンをキャプチャしておく

・同じ動画を見た人同士で、何がわかったのか交流し、確認したり情報を補完したりする

③分担視聴した動画クリップからわかったことを伝え合う

・付箋を示したり、キャプチャした画面を提示したりしながら、相手の納得が得られるように説明する

・よくわからないところは質問し合い、互いの情報が理解できるようにする

④互いの情報を組み合わせて、課題に対する解を個人で出し、心情円盤を使って表明する

⑤グループや全体で交流し、自分の考えを再構築する

・対話の内容

①自分が担当視聴した動画から分かったことを伝え合う。質問する。

②「食料自給率は低いままでよいか」の課題に対する自分の考えを心情円盤で表し、その理由を伝え合う。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

気づいたこと

・グループ間で「意見の言い合い」で終わっているグループと「からみあい」があるグループの差がある。

・自分の分担した動画の内容を十分に理解して説明している子と、そうでない子がいる

・司会が話し合いを進行する力が不足している

・なんとか質問を出そうとしている様子も見られる

・友達の言ったことに対するよいつぶやきもある

・相手のミスや知識不足を受け入れない発言がある

・心情円盤の色の説明では、3つの動画から分かったことを根拠に自分の考えを述べている子と、自分の想像、経験からしか述べていない子がいる

・伝え合いが終わったら、その後関係ない話になるグループが多い

・発言量が少なくても、大事なことを言っている子がいる

改善アイデア

・分担視聴する際には、徹底的に調べたり理解したりする時間を設け、相手に確実に説明できるようにする。浅い理解は浅い対話しか生み出さない。

・理解力が低いと感じる児童は、あらかじめ理解力が高い児童と2人で動画を視聴するようにし、理解の補完を促す。

・伝え合いが終わった後に何をするか、指示をしておく

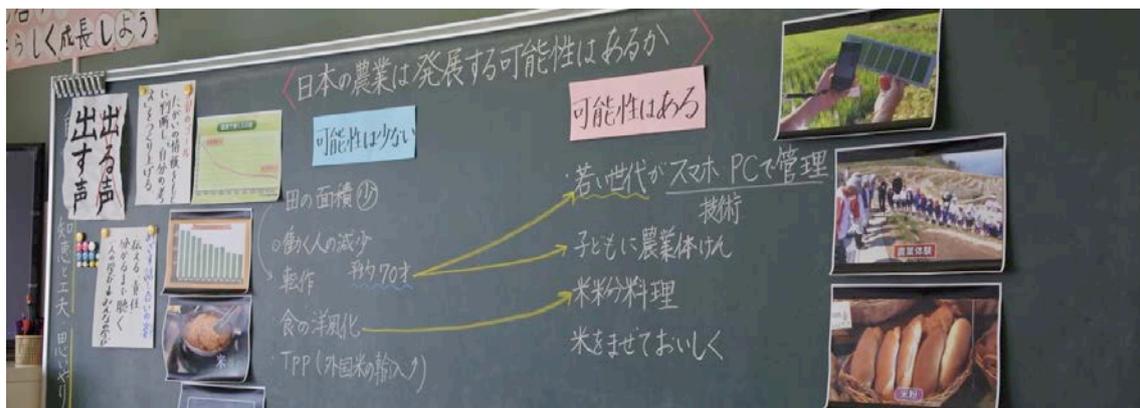
・司会児童を集め、こんな話し合いをしてほしい、こんな役割を担ってほしいということを十分に伝えてから話し合いに入る。「質問の技カード」など、話を広げるためのオープンクエスチョン

ンを使いながら話し合いを進めるよう指導する。

・心情円盤は互いの意見の違いが一目で分かり対話の活性化には効果的であるが、色の配色の微妙な差異にこだわって話をさせたり、つつこんで質問させたりするよう教師の声かけが必要。

「なんとなく」この色にした、にならないように。

・心情円盤を使う話し合いは、グループより全体での交流に変更する。その方が色の偏りが少なく多様な意見を知ることができる。



【対話的な学習活動に関する実践レポート3】

●実践者名（所属・担当学年）

山口眞希（金沢市立大徳小学校・5年）

●議論を促す指導方法

終盤に2項対立の課題を投げかける番組を視聴する

心情円盤で自分の考えを表明する

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

5年 社会 わたしたちの生活と情報

・学習の目標

動画クリエイターの仕事について、その工夫や収入を得る仕組みを理解するとともに、動画共有サイトが誰もが楽しめる場にするにはどうすればよいか話し合う。

・本時の流れ

- ①子ども達の趣味調べの上位に位置した動画共有サイトについて学習することを伝える
- ②動画クリエイターに対してどんなイメージを持っているかや、好きな動画クリエイターについて聞く。
- ③番組を視聴する
- ④動画クリエイターがどうやって収入を得ているかや、工夫点、失敗について番組で出てきたことを再度確認する。
- ⑤『すごく面白いけど、人を不快にさせるかもしれない動画』と『全然面白くないけど人を不快にさせない動画』のどちらがよい動画だと思うか考え、心情円盤を使って表明。グループで話し合う。
- ⑥どうすればみんなにとって楽しい動画共有サイトになるかグループで話し合う
- ⑦ ⑥について全体で交流し、学習をまとめる

・対話の内容

①『すごく面白いけど、人を不快にさせるかもしれない動画』と『全然面白くないけど人を不快にさせない動画』のどちらがよい動画だと思うか考え、心情円盤を使って表明。グループで話し

合う。

②どうすればみんなにとって楽しい動画共有サイトになるかグループで話し合う

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・心情円盤で、割合が半々ではないにもかかわらず、また、割合がそれぞれ違うにもかかわらず、その理由が「おもしろい方がいいけど、人を不快にさせたらダメだと思ったからです」とみんな同じになってしまっているグループがあった（d13～16）。前半の話し合いでは、2択にした方が各自のこだわりポイントが明確になるのではないか。

・普段 YouTube をよく見ている児童とそうでない児童の意見の違いがおもしろい。よく見ている児童は面白さの必要性を熱く語り、そうでない子は「だから日本がダメになるのよ」とクール。そういう違いを取り上げて、全体の議論に持っていくとよかった。可能かわからないが、そういう議論になっているグループを教師は見つけることにアンテナをはり、見つけた場合はこの録音をみんなで聞く、というのも新たな考えや対話をクラス全体で生み出すことになると思った。

・議論が白熱している話題（たとえば2回目のd13～d16の「いやな人は見なければいい」「でも見てから不快になる場合もある」「みんなの気持ちは違うからみんなが不快にならないというのは不可能」のような話し合い）は、全体に取り上げ投げかけると。

・グループのみんなが同じ意見だった場合に「同じです」で終わってしまわないよう、日頃から「同じでも微かな違いは絶対あるはずだから話をする」という指導をしておく。

・グループのみんなと絡み合う子と、特定の人としか絡まない子がいる。ファシリテーターは、絡み合いの少ない子同士をつなげる役割ができるように指導が必要。

【対話的な学習活動に関する実践レポート4】

●実践者名（所属・担当学年）

山口眞希（金沢市立大徳小学校・5年）

●議論を促す指導方法

・「昔話法廷」という有罪か無罪か番組内では答えが出ない番組を視聴し、自分の考えを決めて討論する

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

5年 国語 きいてきいてきいてみよう

・学習の目標

話し手の意図を捉えながら聞き、疑問点を整理して自分の意見を言ったり、質問をしたりしながら討論をすることができる。

・本時の流れ

- ①前時までに学習した「傾聴すること」「相手の意図をつかみながら聞くこと」「質問をして理解を深めること」を意識しながら討論する というめあてを確認する
- ②番組を視聴する。証拠検討表にメモをしながら視聴する
- ③争点をクラス全体で確認する
- ④自分の考えを決定し、判決用紙に記入する。
- ⑤グループで討論する
- ⑥フリーでいろいろな人と討論する
- ⑦友達の考えも取り入れながら最終決定する
- ⑧自分たちの討論をふり返る

・対話の内容

被告人トン三郎が有罪か無罪か討論する

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・非常におもしろい題材なので、対話は活性化していた。相手への反論もよく出ていた。はじめ

の子の意見はみんながよく聞いているが、話し合いが進むと、話の途中でかぶせるように反論が出てくるグループもあった。傾聴するということをしっかり意識させる。

- ・必ず「番組の中に出てきたこと」を根拠に考えをつくるよう指示することが必要であった。番組に出てきた事実を根拠にすることからはみ出して、「自分の想像」で話している子もいると分かった。たとえば、タブレット端末で動画を視聴できるようにしておき、証拠となるシーンをキャプチャさせてそれを示しながら話したり、すぐに番組を確認できるようにしたりするなどの手立てや、黒板にキーシーンを印刷して貼っておくなどの手立てが必要。ホワイトボードに根拠を書き出しながら討論するという方法も、「根拠」を意識させるためにはよいのではないか。

- ・ミニ討論ゲームをして討論の方法や楽しさを理解してからこの授業にのぞんだから、このように遠慮せず議論する姿が多く見られたのではないかと思う。

【対話的な学習活動に関する実践レポート5】

●実践者名（所属・担当学年）

宮崎 誠（川崎市立富士見台小学校・5年）

●議論を促す指導方法・その方法を採用した理由

発問の工夫

・伝わりやすい言い方や発問のタイミングを工夫する。発問をわかりやすくすることで、どの子も課題をつかむことができ、進んで話し合いに参加できるようにするため。

田の字チャートでの思考の整理とホワイトボードを活用したグループでの話し合い活動

・シンキングツールの利用：タウン誌A・タウン誌B×良い点・悪い点を観点とする田の字チャートを埋める。タウン誌の特徴を先に考えを整理しておくことで、発言できるようにするため。

・ホワイトボードの利用：発言を書きとめ可視化することで、それを対象とした対話を促すため。また、学級全体で共有する際に、他のグループの話し合いの様子を共有しやすいようにするため。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・5年・国語・新聞を読もう

・学習の目標

・複数の新聞記事を読み比べることの意味や効果を知ったり、見出しやリード文から要旨を捉えたりすることができる。

・メディアは送り手の意図によって構成されていることを理解できる。

・本時の流れ

1. 番組を視聴する。

『メディアタイムズ 第2回』 「思いを届ける新聞づくり」

2. 番組を視聴し、考えたことをワークシートに書く。

3. 二つのタウン誌の記事の違いについて考える。

4. なぜ、それぞれが違った内容の記事になっていたのかグループで話し合い、交流する。

5. 話し合ったことをもとに、自分の考えを文章にまとめる。

6. 学習の振り返りをする。

・対話の内容

2つのタウン誌を比較し、なぜ、それぞれが違った内容の記事になっていたのかグループで話し合う。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・グループによって話し合いが活発だったところとそうでないところの違いが大きかった。グルーピングを工夫し、より活発な話し合いができるようにしたい。

・発問がわかりづらく、進んで話し合いに参加できていない様子が見られた。発問をシンプルにし、子供たちが課題をつかみやすくしたい。

・田の字チャートに書いたことを説明するのに時間がかかり「なぜ、それぞれが違った内容の記事になっていたのか」について対話している時間が少なかった。田の字チャートで書いたあと、「なぜ、それぞれが違った内容の記事になっていたのか」書かせてから対話をするとう改善できると考えられる。

・言いつばなしになっていることが多かった。発言に対して質問したり意見を言ったりして考えを深める対話ができるように指導することで改善できると考えられる。

【対話的な学習活動に関する実践レポート6】

●実践者名（所属・担当学年）

宮崎 誠（川崎市立富士見台小学校・5年）

●議論を促す指導方法・その方法を採用した理由

番組を見て分かったことを、板書で整理する。

・番組を見て分かったことを視覚的に整理することで、対話をするときに学んだ内容を生かすことができる。その際は、番組の静止画を活用する。

ホワイトボードミーティングの手法

・前回の実践では、児童の意見が言いつばなしになっていることを挙げた。聞き返しのスキルを高めていくことで、相手の考えをより理解し、対話を深めることができる。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・5年・国語・事例と意見の関係をおさえて、自分の考えをまとめよう

（教材名・想像力のスイッチを入れよう 光村図書）

・学習の目標

・事例と意見の関係を押さえて読み、考えをまとめる。

・筆者の説明・挙げている例を、自分の知識や経験などと関係づけながら読む。

・情報内容が送り手の意図によって構成されることを理解できる。

・情報内容の信憑性を判断することができる。

・本時の流れ

1. 課題を確認し、番組を視聴する。

『メディアタイムズ第5回』「フェイクニュースを見抜くには」

2. 番組を視聴し、フェイクニュースを見抜くためのポイントを整理し、「想像力のスイッチを入れよう」での筆者の考えと比べる。

3. 番組の最後の「問い」に対する、自分の考えを書く。

4. 友達と、自分の考えについて伝え合う。

5. フェイクニュースに対する規制がない今の世の中で、メディアとどのように関わっていくか、自分の考えを書く。

6. 学習の振り返りをする。

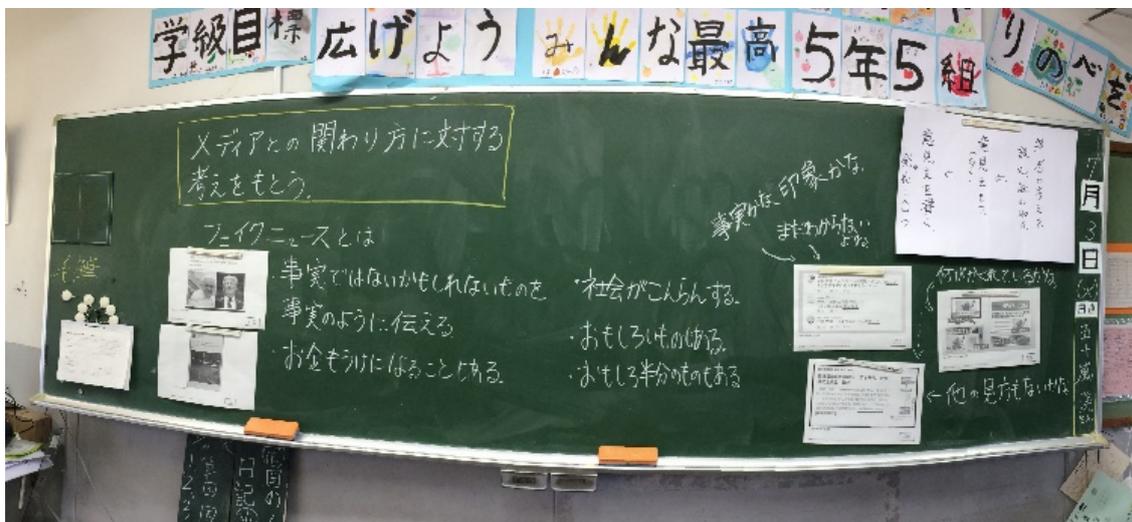
・対話の内容

ネット上にウソをのせたら罰するルールを作るべきか、人を楽しませる冗談までなくなるルー

ルはないほうがよいかを話し合う。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

- ・対話の中で、番組で学習した内容が多く出ていた。番組を見た後に学びを整理することは継続したい。
- ・対話の内容はまだまだ一方通行である。ホワイトボードミーティングの手法を活用したスキルは、実践を積み重ねながら高めていく必要がある。
- ・学習のねらいと、番組の問いがうまく合っていないかった。ねらいと問いをうまく重ね合わせる事ができれば、目的意識がはっきりして、子供の対話がより活発になると考えられる。
- ・自分の考えを言いつくしてしまうと、そこから対話が広がらなくなる場面があった。自分の考えをあらかじめ整理してから話をできるように、ワークシートの工夫をする。



【対話的な学習活動に関する実践レポート7】

●実践者名（所属・担当学年）

宮崎 誠（川崎市立富士見台小学校・5年）

●議論を促す指導方法・その方法を採用した理由

番組を視聴する前に漫画を読む

・番組の内容をより深く理解し、自分なりの考えをもつことができる。番組を見て分かったことを、板書で整理する。

・番組を見て分かったことを視覚的に整理することで、対話をするときに学んだ内容を生かすことができる。その際は、番組の静止画を活用する。

ホワイトボードミーティングの手法

・聞き返しのスキルを高めていくことで、相手の考えをより理解したり、対話を深めることができる。

言葉の宝箱

・聞き返しに頻繁に使われる語句を、掲示板に貼って掲示する。普段から見えるところに掲示することで、子供が自然に言葉をつかえるようになる。

ワークシートの工夫

・本時では、番組コンテンツで紹介されているワークシートを活用する。「二次創作を認めるべき」か「禁止するべき」に対する自分の考えをメーター上を書くことができ、対話の前と対話の後の気持ちの動きが分かりやすい。また、どちらか悩んでいる児童も直感的に考えを表現できる。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・5年・学級活動

・学習の目標

○著作権について知り、日常の中にある諸問題に気づき、著作物と正しく付き合っていく。

○社会・文化・経済などとメディアとの関係を理解できる。

・本時の流れ

1. 「ドラえもん」を読み、漫画がどのように作られているか、一冊の制作にどれほどの苦労があるかなどを考える。

2. 課題を確認し、番組を視聴する。

『メディアタイムズ第8回』「どこまでがOK?著作権」

3. 番組を視聴し、分かったことを整理する。

4. 番組の最後の「問い」に対する、自分の考えを書く。

5. 友達と、自分の考えについて伝え合う。
6. 対話の後での自分の考えをメーターに記入する。
7. 学習の振り返りをする。

・対話の内容

番組の問いをもとに、二次創作を認めるべきか、禁止するべきかを話し合う。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・番組を視聴する前に漫画を読んだことで、話の内容がより身近になっていた。対話の前に題材がより自分事になるような体験活動や番組視聴といった工夫を取り入れる。

・対話をしているなかで、なかなか自分の考えを変えられない児童がいる。変わらないにしても、相手の考えを組むためには、聞く姿勢を身につけて行くことは大切である。グループの意見を一つにまとめる活動を取り入れ、聞くことに対する必然性を高める。

・考えがメーターに表されることで、「どちらか」の時よりも気持ちを表現しやすかった。授業の最後に、もう一度考えを書く活動を取り入れたことで、対話の良さを実感できた児童が多かった。ので、継続する。



【対話的な学習活動に関する実践レポート8】

●実践者名（所属・担当学年）

宮崎 誠（川崎市立富士見台小学校・5年）

●議論を促す指導方法・その方法を採用した理由

言葉の宝箱①

・前回の実践に引き続き、話し合いの語彙を増やすために、ホワイトボードミーティングの手法から、「聞き返し」のキーワードを掲示した。日常的な指導の中でも活用することで、対話をより深めることをねらった。

言葉の宝箱②

・①の活動に加え、放送番組Qを活用し、番組で出てくるキーワードである「Qワード」を掲示した。番組を見ながら、具体的な「Qワード」の使い方を学び、対話に生かせるようにした。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・5年・国語と学活の合科（本時は学活）

・学習の目標

○メディアを使って、世の中や生活を良くしていくには、メディアがどうあると良いか考える。

・本時の流れ

1. それぞれが、本時のめあてを考えながら番組を視聴する。

『メディアタイムズ第9回』「何を選んで伝える？テレビニュース」

2. 番組を視聴して、考えたことを発表し合い、本時のめあてを確認する。

「メディアを使って、世の中や生活を良くしていくには？」

3. 「事実だけを伝える」べきか、「意見も伝えたい方がいい」とかという最後の問いについて、自分ならどちらの立場がよいと思うか、その理由もあわせてワークシートに書く。

4. どちらの立場の人もいる社会において、その問題を解決する方法を考えてそれぞれワークシートに書く。

5. グループで話し合い、一番よいと思うものに決める。

6. 学習のまとめとして、問題を解決するアイデアを共有していくことで、メディアのあり方について他者とともに考えていく大切さについて確認する。

7. 学習の振り返りをする。

・対話の内容

「事実だけを伝える」べきか、「意見も伝えたほうがいい」か、自分の意見を書き、それをもとにどの考えが良いか話し合う。

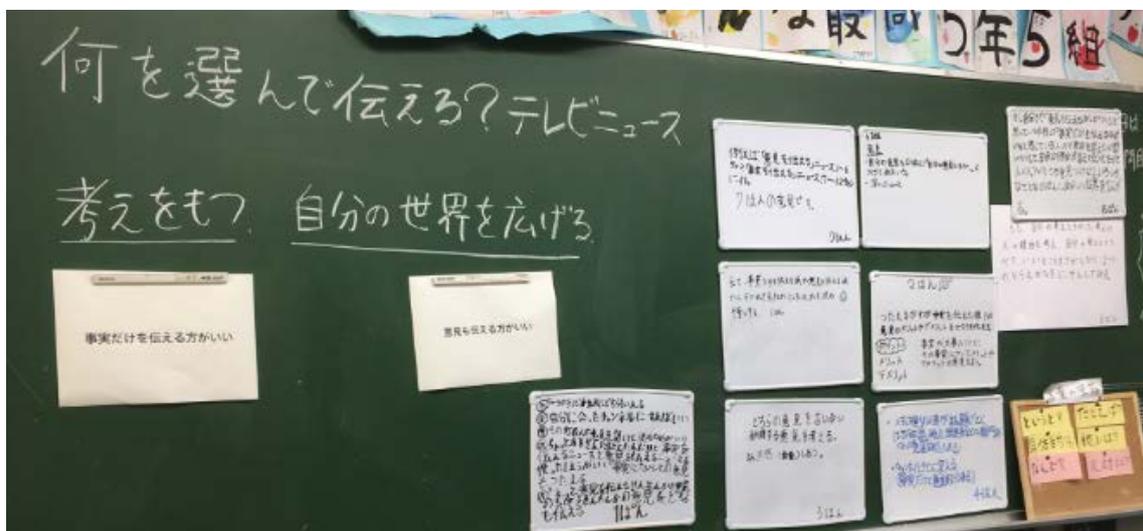
●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・本時は、授業を組み立てる段階で活動のねらいが曖昧になってしまっていた。対話を軸に授業を考えるのではなく、目標に向けた対話の場を設定する。

・言葉の宝箱の活動を続けたことで、お互いの考えを一方向的に伝えるだけでなく、聞き返しや友達の見解に、自分の考えをつなげる発言が目立ってきた。さらに継続していく。

・小規模グループでの対話を継続してきたが、いろいろな対話の仕方を学ぶために、大きな集団での対話の機会を増やして、どのようなやり取りをするとよいか学ぶ機会を作る。

・小規模グループの活動では、普段一斉学習で発言が少ない子も、よく話をしている。一対一の対話の活動も取り入れ、より自然なやり取りができるような機会を作る。



【対話的な学習活動に関する実践レポート9】

●実践者名（所属・担当学年）

薄井直之

古河市立上大野小学校・6年

●議論を促す指導方法

- 自分の考えや思いを表現した「俳句」について聞き手に“適切に伝わっているか”を意識させた。そのために、俳句を読んだ後に聞き手が感じた俳句の情景を読み手にフィードバックさせ、その後に読み手がイメージしていた情景を説明させる。双方のイメージした情景から共通点や相違点を確認し、より適切な表現について話し合わせた。
- 伝わったかどうかを意識させ、伝わっていない場合その原因を考えさせた。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

- ・ 学年：6年
- ・ 教科：国語
- ・ 単元：「句会を開こう」
- ・ 学習の目標
 - 表現の効果を考えて俳句を作る。
 - 表現の仕方に着目して、よいところを伝え合う。
- ・ 本時の流れ
 - (1) 各自が作成した俳句を1人ずつ読み上げる。
 - (2) 聞き手の児童が、俳句を聞いてイメージした情景を読み手に伝える。
 - (3) 読み手の児童が、自分がイメージした情景を説明する。
 - (4) 読み手と聞き手とでイメージする情景の相違点や共通点を話し合い、読み手の意図が伝わったかどうかを確認する。
 - (5) より鮮明に情景を伝えるための表現について話し合う。

言葉の力

表現のくふうを考える

○ 伝えたいことを表すために、効果的な表現を考える。

- ・ 様子をほかのものにたとえる。
- ・ ふさわしい言葉をさがす。
- ・ 言葉の順序を入れかえる。

○ 作品を味わうときにも、表現のくふうに目を向ける。

・対話の内容

● 《「寒い夜 月の光を 見つめてる」と読んだ句に対して》

| | |
|------------|---|
| 聞き手 | <ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい情景はイメージできた。 ・作文のような書き方をしている、俳句としては工夫が足りないと思う。 ・月を見て、なにか考えたの？⇒月がきれいだと思った。 |
| 聞き手 読み手 | 「見る」という表現は変えず、「月の光を月光に変える」程度の話し合いになる。 |
| 教師 | <ul style="list-style-type: none"> ・月を見てきれいだと思って、他にはなにか目に入ったり考えたりした？ ⇒「月だけに集中していた」 ・月だけに集中しているような表現を考えてみたら？ |
| 聞き手 読み手 | <ul style="list-style-type: none"> ・夢中になる。集中する。感動する。心を奪われる。など情景や心情を適切に表現しようと話し合う。 ⇒「月光が 心をうばう 冬の夜」と表現を変更した。 |

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・児童が作成した俳句で「楽しい」や「すごい」など伝えたい内容を効果的に表現できていない句が多くあった。そのためグループでより効果的な表現の工夫を考える話し合いをしているように見えた。

・効果的な表現をする際には、個々の児童だけでなく学級全体としても語彙力が必要となる。「楽しい」や「すごい」などの表現は、十分に意図や思いが伝わらないとして、児童の作文や発表の際にもクラスとして“使用禁止”となっていた。しかし俳句の場面で多くの児童が使用していた。

・参加者発言の順番(図1)を確認すると、発表者の表現の工夫について考える時間をとったことで、発表者に対して質問をしたり提案をしたりしている様子が分かった。俳句の表現が分かりにくい児童や説明が不明瞭で聞き手に伝わりにくい児童に対して、他のメンバーが質問をしている様子も確認できた。必然的に、質問を受け続けている児童の発現量が増えていた。

しかし、発表者の児童が説明不足になってしまっている傾向があった。聞き手側から「つまり〇

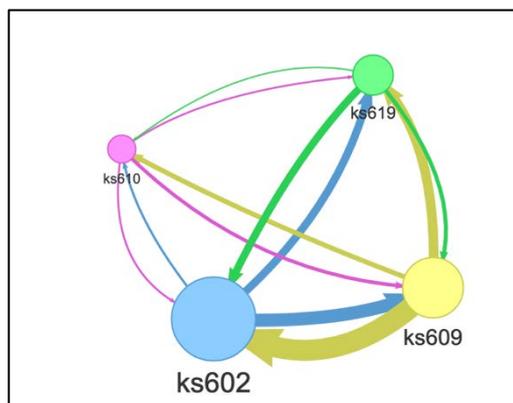


図 1 参加者発言の順番

○ということ？」という確認や「言いたいことはわかるよ」などの反応する言葉が多くあり、他者の発言の終末部分で他者への割り込みをしている児童の傾向も見られた。

割り込みの傾向が強く見られるが、議論としては、グループで表現について話し合いを進めていることが分かった。



図 2 参加者発言の議論参加の特徴

【授業改善のアイデア】

日常的な話し合いの指導では、相手の発言を最後まで聞くことをルールとしてきた。しかし、今回の学習の場面で見られたような発言者の説明が不足していたり、発言に苦慮したりしている場面では他者からの割り込みが効果的なこともあると分かった。周りの児童が、発表者の意図を確認したり、表現について改善したりするような場面においては、割り込みも必要だろう。学習の目標を明確にして、その達成のために議論のルールを適切に設定する必要があると思う。

【対話的な学習活動に関する実践レポート 10】

●実践者名（所属・担当学年）

古河市立上大野小学校 薄井直之

●議論を促す指導方法《事前の確認、ジグソー的学習》

（新聞記事からニュースの内容を紹介し、自分と異なる記事を読み取った児童に感想を伝え合う活動）

・活動の前に、同じ記事を読んだ児童同士で読み取りを確認して、内容を確認する時間を設けた。記事の内容の確認や互いの感想を知ることで、どのようにニュースを紹介すればよいか確認した。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

国語（単発）

「5W1Hの視点で新聞記事を読み取り、記事の感想を伝え合う。」

・学習の目標

- ・新聞記事の文中から、「5W1H」を正しく読み取ることができる。
- ・新聞記事の内容を読み取り、自分の考えや感想をもつ。
- ・記事に対する感想を伝え合い、ニュースについて考えを深める。

・本時の流れ

《授業前までに》

- ① 4つのニュースから1つを選び、記事を読み取る。
- ② 記事の文から5W1Hを見つけて、ワークシートに書き抜く。
- ③ 記事に対する自分の感想を書く。
- ④ 同じニュースの記事を選択した児童同士でワークシートの確認をする。

《本時》

- ① 4人のグループ内で自分が選択した記事の紹介をする。
- ② 記事から書き抜いた「5W1H」について説明する。読み取りについてグループ内で確認し合う。
- ③ 記事に対する自分の感想を伝え合う。
- ④ 紹介された児童は、その感想やニュースについての意見を伝える。

・対話の内容

《稀勢の里が引退する記事から》

◎「引退をしてほしくなかった」と簡単な感想を述べた発表者に対して、

・「茨城県から横綱の力士が誕生して、みんな喜んでいて。私の家族も応援していた。応援してくれている人がたくさんいるのに、引退するのはとても悩んだと思う。悩んでいることも考えて記事を読んだほうが良いと思う。」

・「引退したとしても親方や解説者として相撲界のために活躍する方法がたくさんあると思う。続けることがつらいということを考えてほうが良い」

など、新聞記事以外にも TV の報道を目にしている児童が、稀勢の里の立場を深く考えていた。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア



図 3 児童の発言の順番と発言量

これまで授業の記録から、話し合いを活発にするポイントとして、「聞き手側が相槌を打つ」、「発表者の発言の補助を行う」という聞き手側の積極的な聞く姿勢が重要であると分かった。今回の話し合いでは、《発言に消極的な児童》と《話し合いの進行に意欲を示すリーダー的な児童》が同じグループになるように編成し、進行役の児童を中心に聞き手側が積極的な姿勢を示すように促した。進行役の児童の発言量が多く、他の児童に意見を求めていることが分かる。

積極的な姿勢は、児童の議論参加の特徴のグラフを見ることで確認することができた。グループ内のすべての児童が、他者への割り込みの傾向が強く出ており、発表者の発言の途中で「相槌をうつ」児童が多かった。また、進行役の児童は、発表者の発言を聞いて「言葉を言い換える」、「発言の補助をする」ということを積極的に行っていた。

話し合いの指導の1つとして、「発表者の発言を最後まで聞く」ことも大切であるが、「途中で確認をする」、「発言を補助する」などの聞き手側も積極的に発言をする機会があることで議論が活発になることが分かった。

「何を」、「どのように」話し合いをして、「話し合いのゴールをどうするか」という活動の目的を明確にして、話し合いのルールを設定する必要がある。

今回の「割り込み」の効果は高学年で、ある程度の話し合いのスキルが定着している児童だからこそ現れたものだろう。発達段階に応じて、

- ・低学年…相手の話を最後まで、うなずきながら聞く。
- ・中学年…相手の話を聞き、相槌を打つ。最後まで聞いてから質問をする。
- ・高学年…相手の話を聞き、必要に応じて質問や確認をする。

という指導の系統性も考えていきたい。

《議論をする前段階として》

・新聞記事を読み取り、感想を伝え合うという活動を行った。各自のワークシートを中心に活動を行ったが、自分の読み取りに不安を感じている児童が多かった。そこで、同じ記事を読んだ児童どうして互いの読み取りや感想の確認をすることが効果的だった。この活動を経たことで、異なる記事を選んだ児童に紹介する前に自信をもった児童の姿が見られた。

異なる考えの児童同士の意見交流だけでなく、似ている考えの児童同士で意見交流することも効果的だった。

ニュースに対する感想をもつことが難しく、内容が「すごい」や「初めて知った」のようにニュースを深く理解していないものが多かった。ニュースの内容によっては、関係する人がいる場合、その人の立場や背景について考えさせることで、ニュースについて感想や意見をもてるようにしたい。そうすれば、互いの感想について深く意見交流ができると思った。

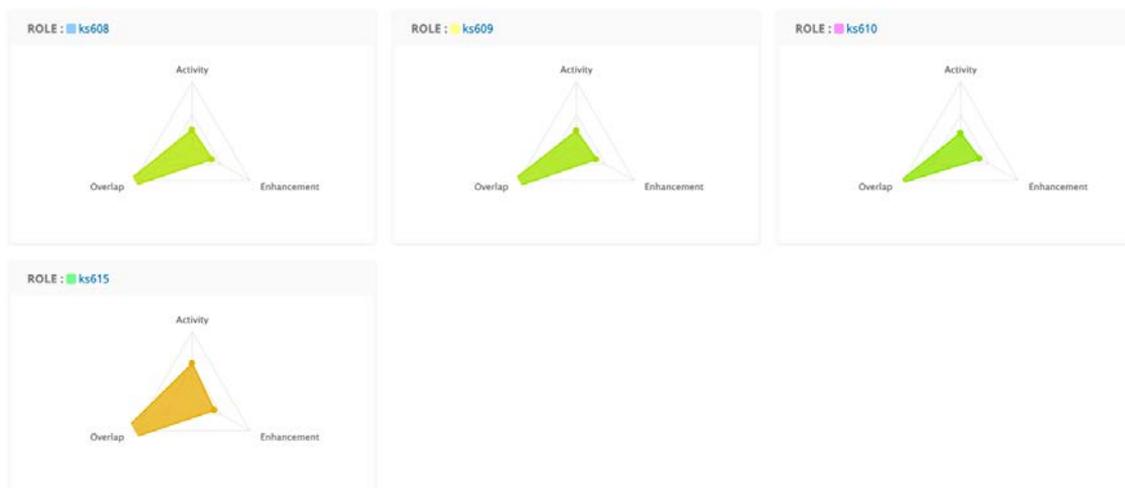


図 4 児童の議論参加の特徴

【対話的な学習活動に関する実践レポート 11】

●実践者名（所属・担当学年）

薄井直之

古河市立上大野小学校・6年

●議論を促す指導方法

- ・「児童数が減り、このままでは廃校してしまうかも知れない」という児童が主体的に考えることができる学校の現状を解決する方法を考えることを課題とした。
- ・学校生活の中で自分たちが頑張っていることを考えさせて、PRすることが大切だと伝えた。
- ・付せん紙を用いて、自分のアイデアと友達の考えをまとめながら話し合いを進めた。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

- ・学年：6年
- ・教科：総合的な学習の時間
- ・単元：「上大野小アイデアソン」～上大野小学校のキャッチコピーを考えよう～
- ・学習の目標
 - ・上大野小学校の学習や児童の様子、歴史や地域との関わりを知り、その良さをPRする学校のキャッチコピーを考える。
- ・本時の流れ
 - (1) 活動のめあての確認
 - (2) メディアタイムズ第14回「“心を動かす”キャッチコピー」を視聴する。
 - (3) キャッチコピーについて「少しでも大げさに表現してはいけない」のか「ある程度なら大げさに表現してもよい」かについてグループで話し合う。
 - (4) グループでの決定にもとづいて、学校のキャッチコピーを考える。
- ・対話の内容

「少しでも大げさに表現してはいけない」のか「ある程度なら大げさに表現してもよい」かについて

⇒すべての児童が「少しでも大げさに表現してはいけない」と考えていた。

その理由として、事実をPRする分には大げさにならないと考えている児童が多かった。

【例】

- 去年の欠席者ゼロの日が101日だったこと。

- iPad が 1 人 1 台ずつあること。
- iPad を使ってプレゼンテーションをしている。

【教員から】

事実であることは違いないが、それを PR しても学校の良さがわからない人もいるのではないか？

【児童たち】

確かに、古河市内の人なら iPad の授業がイメージしやすいけど、その他の地域の人にはわかりにくいかも知れない。キャッチコピーを見せるターゲットを決めないといけない。

●記録を確認して得た授業改善のアイデア

少しでも大きさに表現してはいけない」のか「ある程度なら大きさに表現してもよい」かについて、全員が大きさを表現してはいけないと考えていた。

今回の学習では、「ターゲットは誰か」によって、キャッチコピーの内容や発信する目的が変わることに気付く児童が多くいた。しかし、グループごとにターゲットの設定を行ったため、他のグループと自分のグループとの比較がしにくく、活動に困っている様子が見られた。表現活動では、ねらいに応じて、伝える相手を全員が統一して活動したほうが良い場面と、個々に設定する場面があるため、授業前にしっかりと設定することを心がけたい。

今回の活動では、自分の考えを書くために付せん紙を用意した。

児童たちは、付せん紙に自分の考えを書き出し、それをもとにグループで考えを共有・分類する活動の場面で意見の交流が活発となっていた。話合いが活発なグループは、考えに応じて付せん紙の色を統一し、色分けをして意見をまとめていた。付せん紙の色分けによって考えの傾向が可視化され分類する作業が円滑に進行していた。しかし各自が所持している付せん紙の色を自由に使っているグループでは、意見の取りまとめに苦慮しているグループがあった。

児童が考えたり、議論をしたりする活動を行う際には、事前に話合いの視点やポイントを洗い出し、それに合わせて付せん紙の色を変えて考えをまとめるようにしたい。このような経験を重ねることで、児童自ら付せん紙の色分けのルールを作り、児童主体で円滑な話合いができるようにしたい。

【対話的な学習活動に関する実践レポート 12】

●実践者名（所属・担当学年）

栗原 利香

古河市立上大野小学校・第5学年

●議論を促す指導方法

- ・テーマの観点にそって各自が調べたいことを具体的に決め、それについてグループで話し合わせる。
- ・中間発表を行うことで、他のグループからの質問を受け、グループごとに回答方法を考えさせる。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

- ・学年・教科・単元

第5学年・国語「和の文化を受けつぐ」

- ・学習の目標

○伝えたい内容や目的に合わせて、資料を活用して説明する内容と構成を考えることができる。

- ・本時の流れ

1. グループごとに決めた「和の文化」の観点を確認する。
2. 観点ごとに考えた調べたいことや調べる方法について話し合う。
3. 決まった内容は各自ワークシートに記録していく。
4. 各グループで調べたいことが確定したら、タブレットを使いインターネットで検索をして調べていく。
5. 調べた内容に関しては、必要な情報がどれなのか、わかりやすく表現するにはどうすればいいのかなど、グループ内で話し合いながらワークシートにまとめたり、タブレットに保存したりする。
6. 本時のまとめとして、調べることができた項目や、次時の活動内容に関して確認する。
7. 授業の振り返りをする。

- ・対話の内容（本時の流れ5：グループ内での対話を抜粋 A, B, C 児童・T 教師）

A：「僕は、和室の特徴について調べるのだけれど、和室がどんな風なつくりになっているか調べたいのだけれど・・・」

B：「それなら和室で検索して、画像をさがすといいのかな。」

A:「そうだね・・・。」

「たくさんの画像があるから迷うね。」

T:「写真は、和室全体が写っているものを選ぶといいね。和室の中の場所にはそれぞれ名前があったり、どのように使われているかなど調べたりすると、和室の良さが聞いている人に伝わるかな。」

C:「画像の中にそれぞれの場所の名前が書かれているものがないかな。」

A:「和室の中全体が分かる写真があったよ。いろいろな場所に名前が書いてあるよ。」

B:「その写真をタブレットで保存して、部分の名前や意味などについてネットでまた調べて、ノートに書いたり、写真に書き込んだりするといいね。」

C:「それがいいね。」



●記録を確認して得た授業改善のアイデア

・全児童が調べる方法としてインターネットを使って検索をしているので、児童によってはたくさんの情報から知りたいことを見つけ出すのに非常に時間がかかってしまう。そこで、同じグループの中で自分が見つけた情報が適切かどうか確認し合ったり、どれを選択したらいいのか迷ってしまった場合に、グループの友達と一緒に検討してもらったりして協力し合うことができた。

また、インターネットの中のたくさんの情報から必要な情報を選択する際に、選ぶ側が自分だけでなくたくさんの目があることで取捨選択しやすくなってくると思われる。グループ活動の良さが出たといえる。

グループ内では、リーダーの児童とその補助役の児童を中心として話し合いが進行していた。発言が少ない児童にもリーダーの児童が発言を促していた。



図 5 児童の発言の順番と発言量

児童の話合いの傾向を見ると、発言の量、他者への割り込み、会話の盛り上げの3つのバランスが取れていることが分かった。話合いを行う上でのルールやマナーが十分に定着しているようだ。

反面、リーダーの児童や教員の進行・誘導に頼っている児童がいるため、児童たちだけで話し合いを進行するスキルの向上を図りたい。

グループの児童が考えをまとめやすく発言しやすい課題を提示する必要がある。

エクササイズとして、簡単なテーマについて短い時間で話合う活動を取り入れていきたい。朝のドリルや学級活動の一コマで話合う経験を積み重ねたい。

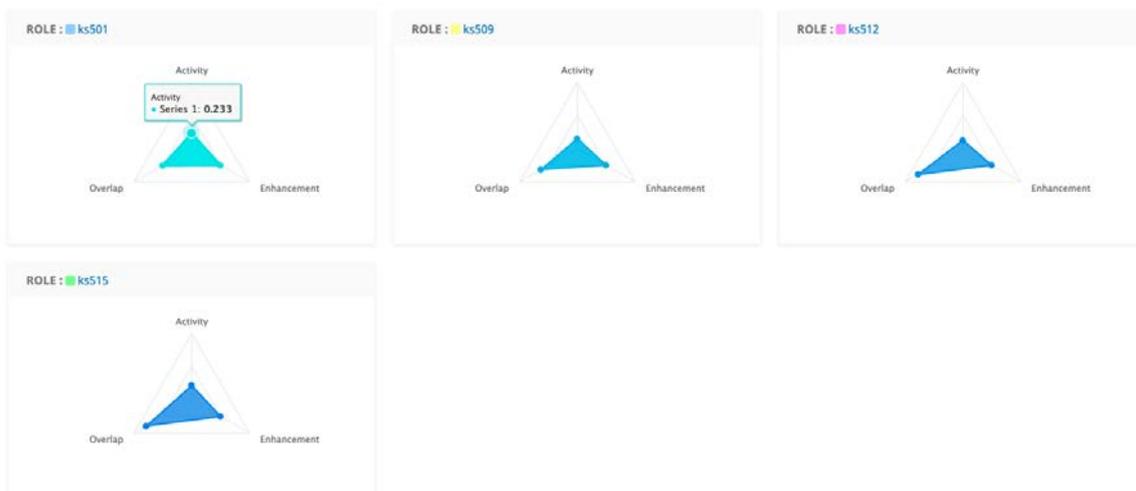


図 6 児童の議論参加の特徴

【対話的な学習活動に関する実践レポート 13】

●実践者名（所属・担当学年）

栗原 利香

古河市立上大野小学校・第5学年

●議論を促す指導方法

- ・ロイロノートを使って、全員に面積を求める共通の画像を送り、自力解決を行った後グループで議論させる。
- ・各グループで話し合った後、グループで出た考えをロイロに提出し、大型TVに写して議論し合う。

●実践の概要（議論している写真、板書の写真などもあることが望ましい）

・学年・教科・単元

第5学年・算数・四角形と三角形の面積

・学習の目標

「ひし形などの四角形の面積を既習の求積公式を適用するなど、工夫して求めることができる。」

・本時の流れ

1. 本時の課題を確認する。
2. 今まで習った面積の公式を確認する。
3. ロイロノートに送った面積をもとめる画像を各自確認し、自力解決をする。
4. グループになり、自分の考えを伝え合う。
5. グループで出た考えの他に、違う考えはないか議論し合う。
6. 各自、またはグループで出た考えをロイロノートに提出する。
7. 提出された考えをグループごとに発表し、議論し合う。
8. どの求め方が一番わかりやすいか考えをまとめる。
9. 「ひし形の面積の公式」について学ぶ。
10. 公式を使って適用問題を解く。
11. 本時の振り返りをする。

・対話の内容（本時の流れ5：グループ内での対話を抜粋 A,B,C 児童・T 教師）

A: 「頂点からまっすぐ横に線を引くと（後で対角線であることを確認）三角形になるから、三

角形の公式を使って面積が求められるよ。」

B: 「本当だね。縦に引いても左右に三角形ができるから、これも同じように求められるよ。」

T: 「いいところに気がつきましたね。他の求め方はないかな。三角形の面積の公式は使えたけど、長方形の面積の公式は使えないかな。」

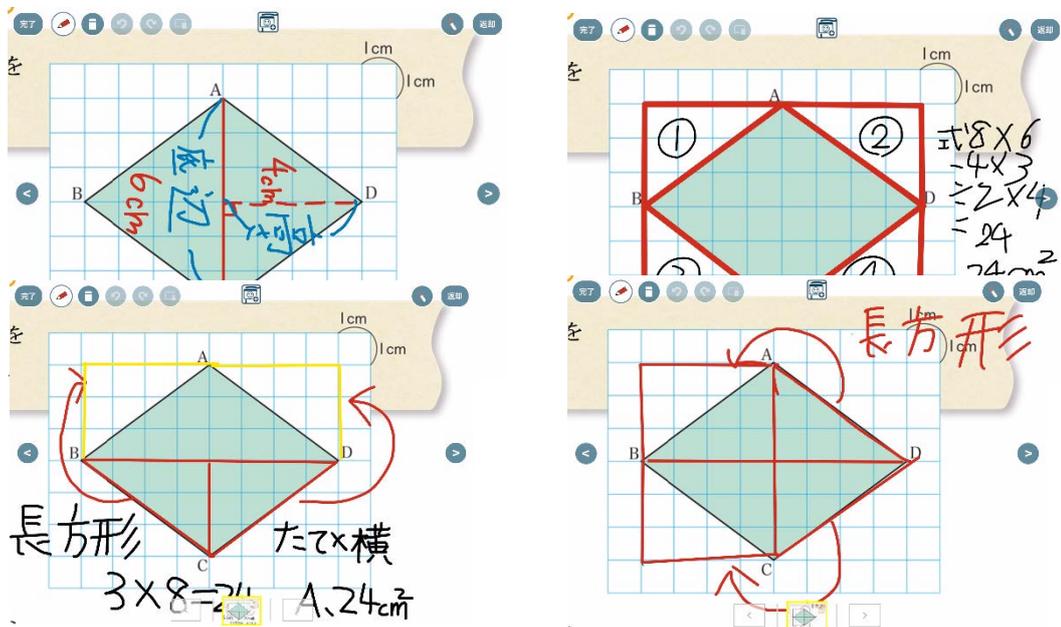
C: 「周りを囲むと長方形になるよ。」

A: 「色のついた部分を縦と横に切ると、できた三角形と周りの三角形は同じ大きさだよ。」

B: 「ということは、周りの長方形の面積を出して、2で割ればいいね。」

C: 「横に切ったときにできる三角形も上に三角形を移動すると長方形になるから、長方形の面積の公式で求められるね。」

A: 「じゃあ、縦に切っても同じ事ができるね。」



●記録を確認して得た授業改善のアイデア

- ・今回のひし形の面積の一番簡単な求め方は、三角形の公式を使ったものであるという結論になったが、そこから公式へと導くことができるので、ひし形の面積の公式を教えるのではなく、自分たちで公式を発見するという形をとってもおもしろいと考えた。(時間に余裕があれば)
- ・ジャンプの問題として、ひしがたに似ている左右対称な四角形の面積の求め方を取り上げ、これも公式を使って面積を求めることができるのはなぜか議論させるのも良いと思う。

《話し合いの傾向》



図 7 児童の発言の順番と発言量

解放や考え方がわかっている児童を中心として話し合いが進んでいるため、発言量に差が見られた。

ロイロノートを活用することで、自分の考えを何度も書き直すことができ、可視化してグループで共有することができた。しかし、考え方や解放については、児童の理解度によるものが大きく、リーダーを中心とした進行となった。

算数科で自分の考えを発表する際には、「まず……。次に……。最後に……。」のように発表の型が決まっている場合が多い。型があることで、児童にとっては発表しやすいと言える。しかし型に沿って発表をするだけでなく、聞き手の児童の反応を見て、「考えが伝わっているかどうか」を確認したり、問いかけたりすることで、より考えが伝わるのではないかと考える。聞き手側の児童も、発表中においても発表者に考え方を確認したり、質問をしたりしながら聞くようなリアクションをしていくことも必要だろう。お互いの考えが伝わっているかどうかを意識して話し合う経験を重ねていきたい。

そのため、積極的にリアクションをして「割り込む」機会が増えることも理想だと思う。



図 8 児童の発言の特徴

5. 課題と展望

本研究では、(1) ペア・グループ学習において対話を促すと考えられる指導方法を整理すること、(2) 実証実践における「学習者間の対話に関するデータ」から指導方法の有効性を検証すること、(3) 「学習者間の議論に関するデータ」から教師が授業改善のアイデアを得ることができるかどうか検証することを目的とする研究を行った。

まず(1)については、教育実践者にヒアリング調査を行うことによって、「個別にワークシートに考えを書かせてから話し合わせる」、「心情円盤でお互いの考えを可視化する」など18の指導方法を抽出することができた。今後は、これらの方法の有効性を発達段階(学年)、教科や学習内容などの観点からより詳細に検討し、さらに実証実践を積み重ねることによって効果的な指導方法として精度を高めていくことが必要であると考えられる。

次に(2)については、(1)で整理された指導方法を用いた13件の実践を行った。そして、いずれの実践においても議論の場で対話に参加できない学習者はいなかったことが示された。しかし、指導方法との関連までは明確にすることができなかつたことをはじめ、十分に有効性を検証できたとは言い難いため、この点を今後の課題としたい。

最後に(3)については、小学校における13の実践レポートの分析を通して、教師は「議論に関するデータ」から授業改善のアイデアを得ることができていることが示された。このことから、学習者の議論に関するデータを得ることは、学習者の話し合いの内容や様子を詳細に把握するだけでなく、教師の授業改善、さらには授業力向上にも繋がる可能性があると考えられる。この点について、学習者の議論のデータを得ることで教師がどのような成長に繋がっていくのかについても今後検討していく必要がある。

本研究において行われた実践はいずれも小学校の5年生、6年生を対象としたものであった。今後は1年生から4年生、中学生や高校生を対象とした実証研究も行い、学習者の対話の様子は本研究で得られたものと類似しているか、異なった様相を示すのかなど、発達段階(学年)による違いについて検討していく必要がある。またそこには、教科や学習内容、学習者が対話についてこれまでにどのような授業を受けてきたか、授業者の教育歴、集団(学級や話し合うグループ)の雰囲気など、様々な要因が影響する可能性があると考えられるため、このような要因との関連についても検討が必要であろう。

以上のような検討課題を踏まえた授業研究を今後も継続することによって、ペア・グループ学習において学習者同士が教え合い学び合う、対話的な協働学習を行うことに関する指導方法の確立を目指していくことをここに記して、本研究のまとめとしたい。

引用文献・参考文献

文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm